

人文会 NEWS

2013.1

no.

114

—書店現場から—

「老舗書店」の矜持とチャレンジ

長崎健一 1

十五分で読むイタリア現代思想

岡田温司 7

公立図書館における

人文書の配架についての一考察

吉野友博 20

2012年研修旅行報告

<http://www.jinbunkai.com>

イタリア現代思想

裸性

「裸である」剥き出し」状態とは。

2730円

ジョルジョ・アガンベン
岡田温司、栗原俊秀訳

無機的なものの
セックス・アピール
オルガスムなきセクシユアリティ。

マリオ・ベルニオーラ
岡田温司、鮎江秀樹、
蘆田裕史訳
3045円

透明なる社会

ジャンニヴァッティモ
多賀健太郎訳

ユートピアからヘテロトピアへ。
2520円

9のキータームで読み解く。

アガンベン読解 岡田温司
2520円

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
TEL03-3230-6572 価格は5%税込

11/14『朝日新聞』文化面で紹介された話題の本！ 新しい東アジアの近現代史

「上巻 国際関係の変動で読む 未来をひらく歴史
「下巻」テーマで読む人と交流 未来をひらく歴史
日中韓3国共同歴史編纂委員会／編 □各2625円

■12/9『毎日新聞』読書面2012年この3冊で紹介

非正規公務員

上林陽治／著 □1995円

「高裁ワーキングプアをなくす処遇改善」雇用安定の道筋を明示

■12/2『朝日新聞』書評欄で紹介

ホームレス障害者

鈴木文治／著 □1890円

 **日本評論社** 表示価格
税込

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL:03-3987-8621 <http://www.nipponya.co.jp/>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

全3巻／完結！！

真理と方法 I～III

哲学的解釈学の要綱

H.-G. ガダマー著／榎田収・他訳 現代
思想に大きな影響を与えた名著、完結！
(I)新装版／3990円、(II)4410円、(III)3990円

土着語の政治

ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ

G. キムリッカ著／岡崎晴輝・他監訳 多
文化社会におけるマイノリティの権利を、
リベラリズムの立場で擁護する。5460円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎03(5214)5540／表示価格は税込です

第34回サントリー学芸賞

(思想・歴史部門)受賞

トクヴィルの憂鬱

フランス・ロマン主義と(世代)の誕生

高山裕一著 ●2730円

初めて〈世代〉が誕生するとともに、
青年論が生まれた革命後のフランス。
トクヴィルらロマン主義世代に寄り
添うことで新しい時代を生きた若者
の昂揚と煩悶を浮き彫りにする。

ゾンビ襲来

国際政治理論で、その日に備える

D・ドレスナー 著 谷口功一、山田高敏 訳
話題沸騰！各国首脳必携！ ●2100円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/> *価格は税込

弊社は創業明治22(1889)年の、いわゆる「老舗書店」です。

一時期は熊本市内一円の小中高・大学・専門学校とも取引があり、店売・外商ともにそこそこの売上があったのですが、近年の商環境の激変と競争の激化により、私の入社当時(2001年)には厳しい経営状態に陥っていました。

そんな中、私が下した2つの決断が「赤字部門である外商業務を終了する」「書店をリニューアルする」。簡単に申し上げれば、限られた経営資源のすべてを店づくりに投入して生き残りを図る、ということです。

外商に関してはかつて4台の車両と4名の専属スタッフがおりましたが、店舗リニューアルを機に車両は1台のみに減らし、専属スタッフはゼロにしました。そのかわり、地元のお店街の方々のお役に立とうと考え、徒歩圏内のショップや事業所などに営業をかけた結果、約70件の配達先を開拓することができ、店舗スタッフが時間を有効に使いながら配達を行い、今では毎月の固定売上に貢献しています。

そして2006年の7月7日に店舗のリニューアルオープンを迎え、長崎書店は新しいスタートを切りました。

100坪の店内には5坪ほどの小さいギャラリースペースを設け、熊本内外の作家・クリエーターの作品展や、長崎書店オリジナルのフェアなどを常時開催しています。

また、かつて外商倉庫があったビルの3階は「リトルスターホール」という多目的ホールに改装しました。この約30坪のスペースでは、スタッフが「おはなしの森」という読み聞かせイベン

ト(月1回)を行っています。

そのほか、版元さんから人気キャラクターの着ぐるみをお借りしてのイベントを開催したり、気鋭の思想家や文化人類学者、老舗ライフスタイル誌の編集長をお招きしてのサイン会やトークショー等、幅広いイベントを開催して、地域の皆様に好評をいただいています。

そんなギャラリーやホールを活用していくなかで、熊本の様々な分野で活躍される方々との貴重な御縁が多々生まれました。この素晴らしいご縁を活用して本を売る企画ができないだろうか？ そう考えて実現した長崎書店のオリジナル文庫イベントが2010年の「Lai Bunko」でした。熊本出身もしくは熊本在住のどちらかを満たす魅力的な人100名に、とっておきの文庫本を1冊おすすすめ頂き、店内ギャラリーで展開しました。

その結果、1か月間の売上冊数はなんと1858冊という、版元企画の文庫フェアの何倍もの売上を達成。2か月という準備期間で100名の方から原稿とお写真を頂戴することは想像以上に大変な作業でしたが、お一人お一人にアポを取って企画書を持参し、直接ご説明させて頂いたところ、皆様のご快諾を得られました。

この企画によって、地方の書店ならではの可能性を見出すことができたと自負しております。2012年は53名の方にご参加いただき、2年ぶり2回目となる「Lai Bunko 2012秋」(開催期間10月4日～11月30日)を開催、こちらも好評を博しています。

同じく2012年に企画した自店オリジナルフェアに「グリーンボックス・フェア」があります。こちらはいわゆる「バーゲンブック」とか「B本」と呼ばれている、版元の見切り品を集めたフェアなのですが、44日間のフェア期間中、1300冊以上の販売を達成しました(初期在庫は600冊程度、目標売上冊数は500冊でした)。正直申しますと、よくデパートの催事場などで見かけるバーゲンブックフェアは、まさに「安売り」というイメージが先行していて個人的には

好ましく思っていませんでした。

しかし、専門取次の店売を見学に行った際、取り扱いジャンルや版元の幅が想像以上に広く、「これは、自店の客層と売れ方を考慮して、全点自分たちで選書すれば、当たるかも」と考え、私とスタッフの2名で神保町の取次店売で丸2日間ひたすら選書し、仕入れました。

通常のバーゲンブックが実用書や児童書中心であるのに対し、弊店の「グリーンブックス」は文芸・芸術・人文ジャンルを中心に選書し、すべての商品を定価の半額という価格設定で、複数冊購入の場合は全品定価の60%引きという工夫もかなり好評で、購入客の半数近くは複数冊のご購入でした。定価5万円を越す城郭の凶画集や、有名なガラス作家の作品集(定価3万円)といった高額商品も頻繁に売れました。もともと商品価値は高いものの、出版のタイミングや価格、売り方のミスマッチ等で読者の手に渡らなかった本が次々と売れていく。それは我々にとって貴重で有意義な経験でしたし、本の価値をできるだけ正確に見抜き、自店のお客の傾向を知る普段の努力の重要性を再認識できました。

本の価値と、自店の読者を把握できていなければ、いくら半額でも芳しい成果は得られないと思います。その精度を上げるためには日頃の商品情報の収集と分析、販売情報であるスリップの読み込み……そこから仮説を組み立て、検証していくという地道な仕事の繰り返しを、多忙を言い訳にせず可能な限り丁寧に行っていきたいのです。

こういった企画や活動を通して、「本を仕入れて売るだけではなく、地域における文化・芸術の受発信拠点としての書店づくり」「作家と読者、読者同士のコミュニケーションの場としての書店」「新しい視点で本と読者のよき出合いを演出する」という、リニール当初に掲げた理想が、少しずつ現実になってきました。

また、今年になって加盟した書店協業組織「NET21」での共同仕入れや神田村を活用しての

ベストセラー・売れ筋本の確保にも努め、町の本屋としての利便性やニーズ対応にもしっかり応えていきたいと考えています。

そんなこんなで色々なイベント企画や商品調達に取り組んでいる弊社ですが、やはり書店のキモは「品揃え」である、と考えています。つまりそれは、「何を仕入れ」「どこにどう並べるか」ということです。いくら面白いイベントを企画したところで、肝心の平台や棚がつまらなかつたらダメだ、と自戒を込めていつも反省しています。

今現在、世間の関心はどこに向かっているのか？ トレンドは何か？ 外してはならない基本図書やキーパーソンは？ そういった問題意識と興味関心をスタッフ（特に仕入担当）がどれだけ持ち得ているのかは、非常に重要なことです。

直扱いの書籍やリトルプレスの情報にもアンテナを張り、自店のお客とマッチしそうだと思えば積極的に取扱います。その結果、発売の度に3ヶタ売れるリトルプレスも育ってきました。大手取次を通さないからこそ、差別化がしやすく、固定客づくりにつながりやすい直扱いの商品は非常に重視しています。

長崎書店ではスタッフ教育の一環として、JPICの読書アドバイザー資格の取得を奨励しており、そのための受講料と交通宿泊費を全額会社が負担しています（2012年10月現在5名が取得1名が受講中）。読書アドバイザー養成講座では、書店のみならず、古書や図書館を含めた、本にまつわる幅広い知識の習得ができます。

また、受講の為に上京する際には、かなりの数の書店見学と版元・取次訪問を課し、東京の書店の優れた部分を自店で応用することと、取次・版元と顔の見える関係性を築くことを期待しています。

その甲斐あってか、最近の自店の売上は微増を続けており、少しずつですが着実に地力がついでいます。

てきていることを実感しております。

今年に入ってからはお客様からコメントを頂く機会が増えてきました。

「おたくはこのへんでは一番小さい本屋だけど、ちゃんと品揃えしてるね。」

「この本屋に来ると、読みたい本が見つかる。」

「よく通っていた神保町の新刊書店を思い出しました。」

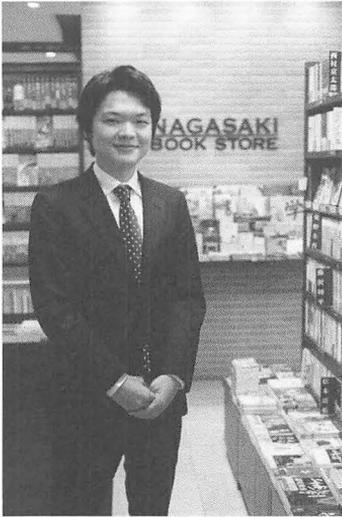
他県の本店の方から見学のお申し込みがあることもしばしばで、同業者の方をお迎えするときには、さすがに緊張します。

もちろん、まだまだ未熟な部分ばかりです。

しかしながら、スタッフと意識的に棚づくりに取り組んでまいりましたので、このようなコメントや反応を頂けたときは、とても嬉しく思いますし、それを励みにモチベーションを高めています。特に人文書に関しては、入り口すぐの一等地に7本の棚があり、隣接ジャンルの文芸書(12本)、芸術書(7本)とともにかなり力を入れて取り組んでおります。

「長崎書店の中心ジャンルのひとつとして、人文書に力を入れよう」そう決めて具体的に取り組み始めたのが2011年の冬でした。人文書ジャンルは、書店側の知識・力量・センスがモノをいうジャンルだと思いますし、それらは一朝一夕で身につくものではありません。売り場の拡大や品揃えの充実を図ったからといって、1か月や2か月で結果が出たり、固定客がつくほど甘いジャンルではなく、数年単位での粘り強い努力と工夫が必要であることは私などが言うまでもないでしょう。しかし、だからこそ専門店での矜持を持てる、取り組み甲斐のある領域だと考えています。

昨年から人文書担当となった弊社スタッフ児玉真也は並々ならぬ熱意をもって仕事に臨んでいます。毎日眼を皿のようにして取次週報やネット書店、版元ホームページをチェックし、「旬」を見逃さない努力を続けています。日々の売れた本はもちろんのこと、売れていないけれども手



筆者 近影

に取られた形跡のある本や、お客様の売場での動き等も、参考情報として蓄積しているようです。東京出張などの機会があれば人文書系の出版社様に向向き、人文書のトレンドや売り方など、可能な限り情報収集に努めていますし、人文書売場に定評のある書店に関しては、東京をはじめ名古屋・鳥取・盛岡・京都など2人で見てまわりました。そうしたなかで仕入れた本が売れ、売場や棚に対して好意的な評価を頂いた時の喜びは格別です。1冊の本を売ることが、売れることが、こんなに味わい深いものなのかと、あらためてかみしめています。

そして最近では明らかに、全国売上ランキングには入らない、他店で取り扱う可能性が低そうな本が動き出すようになりました。

現在、人文書ジャンルで目標としている売上にはまだ到達していませんが、連続と続く意思ある仕事とその結果の積み重ねの先に、自店ならではの完成形に辿り着けるのではないかとという期待感があります。

当店は売り場面積100坪の中小書店ですが、「敷居は低く、間口は広く、奥行きは深く、質が高い」をモットーに、まちの本屋ならではの「親近感」、専門店(職)としての「信頼感」、そして次はどんなことやるんだろう? という「期待感」を備えた店づくりをこれからも追求していく所存です。

最後に、いつも温かいご指導と激励を下さる人文会各社の皆様に、この場を借りて心より厚く御礼を申し上げます。

(ながさきけんいち・長崎書店)

十五分で読むイタリア現代思想

「イタリアン・セオリー」

ファッションや料理だけではない。巷にはイタリアン・ブランドの服や靴やバッグがあふれ、イタメシ屋がいたく人気を呼んでいるようだが、それだけではない。世界の思想界でも、イタリアは今ちよつとしたブームである。著作のほとんどが、世界の主要な言語に翻訳されているジョルジョ・アガンベン（一九四二年生まれ）とアントニオ・ネグリ（一九三三年生まれ）は、その代表とっていい存在だろう。英語圏では、「フレンチ・セオリー」に代わって「イタリアン・セオリー」が台頭してきた、という言い方がされることさえある。

岡田温司

その理由のひとつとして考えられるのは、フランス哲学の大物たち、ミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズやジャック・デリダ等が相次いで世を去った後、相対的にイタリアの思想家たちへの関心が底上げされてきたという事情である。だがそれは、たんなる時間の偶然にして、外在的な原因にすぎない。もっと深い、イタリアに内在的な理由がありそうだ。

そもそもイタリアの思想は伝統的に、国民国家という枠組みに縛られてこなかった、という大きな特徴もっている。このことは、イギリスやフランスやドイツなどとの顕著な違いである。これらの国では、多かれ少なかれ、国家の形成や成長と歩調を合わせるようにして、哲学や美学が発展を遂げてきたといえるだろう。ジョン・

ロックにしても、ルネ・デカルトにしても、ヘーゲルにしても、例外ではない。

しかし、イタリアの場合にはもともと統一国家なるものが存在しなかった。それがやっと形を取りはじめるのは、十九世紀も後半のリソルジメント(イタリア国家統一運動)まで俟たなければならぬ。それまでは、多くの都市国家が林立し、さらにこれにヴァチカン勢力が加わるとともに、くりかえしヨーロッパ列強の介入を経験してきたという経緯がある。イタリアの思想は、政治的で宗教的な対立や葛藤にたえずさらされてきた、といっても過言ではないのだ。それゆえ、生と政治は、つねにイタリア哲学の中心的なテーマでありつづけてきた。「主体」や「真理」などといった観念的で抽象的な問題よりも、生や歴史の現実的で具体的な問題に関心が向けられてきたのだ。

たとえば、ローマ教会から異端宣告を受けたジョルダノ・ブルノー(一五四八—一六〇〇)のことを想起してみればよい。それ以前にも、政治権力や教会権力のせめぎ合いのなかで鍛え上げられたニコロ・マキアヴェッリ(一四六九—一五二七)の独自の政治哲学がある。さらに

時代が下って、ジャンバッティスタ・ヴィーコ(一六六八—一七四四)の歴史哲学や言語哲学も、国民国家の形成に並行しているわけではないのだ。こうしたイタリア的伝統の特異性を抜きにしては、アガンベンやネグリの思想をとらえることはできないように、わたしには思われる(彼らがそれをどこまで意識しているかは別にして)。

それゆえ今日、政治や経済などのあらゆる局面で国民国家の枠組みが事実上、弱体化するか崩壊する状況下にあつて、イタリアの思想がにわかにはアクチュアリティを帯びてきたとしたら、それもある意味では必然であるとするいえるかもしれない。以下では、イタリア的思考がもっとも典型的なかたちであらわれる、「生政治」と宗教(キリスト教)と芸術をめぐるテーマに絞って、ここ二・三十年の動向を素描することにしよう。

「アガンベン効果」

なかでも、ここ十数年におけるアガンベンへの関心の高まりは特別である。あるアメリカの学者はそれを「アガンベン効果」と名づけたほどだ。実際、まだ一九九〇

年代初めの時点では、本国イタリアの大きな本屋さんに入っても、アガンベンの著書を見かけるのはごく稀なことだった。それまでにすでに何冊も上梓していたにもかかわらず。ところが、この状況を一気に変えたのが、一九九五年に出版された『ホモ・サケル』（高桑和巳訳、以文社、二〇〇三年）である。ミシェル・フーコー由来の「生政治」の思考を極限にまで推し進めたこの本は、数年のあいだに多くの言語に翻訳され、世界的な成功をおさめたのだった。では、その理由はどこにあるのか。

何よりもまず挙げられるのは、この本があたかも黙示録的な予言の書のごときものとして受け止められた、という点である。恒常化する例外状態、「剥き出しの生」、近代政治のノモスとしての収容所など、『ホモ・サケル』のなかで系譜学的に検証されたテーゼが、とりわけ九・一一以後の世界情勢のなかで、にわかには現実味を帯びてきたのだった。

たとえば、グアンタナモ収容者やアブグレイブ刑務所での拷問にせよ、テロリズムとの戦いという大義名分にせよ、アガンベンはまるで現代の予言者だ、というわけである。事実、グアンタナモ収容所閉鎖の世論が盛り上

がるなか、スラヴォイ・ジジエクは、ニューヨークタイムスに寄せた記事（二〇〇七年三月二七日付）で、「イタリアの政治哲学者」アガンベンの名前をわざわざ挙げて、現代の「ホモ・サケル」——「生きた死者の騎士たち」——に言及したのだった。

『ホモ・サケル』から三年後に上梓された『アウシュヴィッツの残りのもの』（上村忠男・廣石正和訳、月曜社、二〇〇一年）もまた、賛否両論あわせて、世界的な反響を呼ぶことになる。ここでアガンベンは、フーコー（『社会は防衛しなければならない』が未決のままに残した問題、つまり「生政治は何ゆえに死の政治へと転倒するのか」）に挑戦する。

アガンベンによれば、この転倒はある意味で必然である。なぜなら、本来ひとつのものであるはずの「生」を、医学的で生物学的、政治的で法学的な装置によって線引きしようとするかぎり、生の序列化や選別がおこなわれるのは避けがたいからだ。ナチズムにおいてそれはもっとも顕著なかたちをとったが、民主主義の社会においても、この選別はより表面化しにくいかたちで進行している。それゆえ、こうした装置を宙吊りにして装置の聖性

を暴き出すこと、すなわち「無為」や「瀆聖」という彼の思想の根柢のひとつは、ここに求めることができる。

もちろん、アガンベンのこうした哲学的身振りにたいしては、さまざまな批判も寄せられている。彼の「究極のメッセージは政治的ニヒリズムである」(エルネスト・ラクラウ)。彼は「政治的使命なき思想家」だ(バオロ・ヴィルノ)。逆説やアポリアや誇張といったレトリックを弄して、政治を美学化している(ドミニク・ラブラ)。などといった調子である。ネグリもまた、分裂した「二人のアガンベン」を診断する。一方で、「文献学と言語学的分析の仕事に専心することによって、存在の力に到達する」アガンベンがいるかと思うと、他方で、「実存的で運命論的な恐るべき影のなかを彷徨っている」アガンベンがいる。双面のヤヌス、それがアガンベンの正体だというのである。

おそらく、これらの批判は、大筋においてまんざら外的外れというわけでもない。だが、それらはまた彼の思想の大きな魅力でもある、とわたしは考える。同一化と固定性をことさらに忌避するアガンベン。否定性と肯定性の間に遊ぶアガンベン。二つ——場合によっては複数

——の仮面IIベルソナを巧みに使い分けるアガンベン。

二〇〇〇年の『残りの時 パウロ講義』(上村忠男訳、岩波書店、二〇〇五年)以来、彼の思考はさらに新たな展開を遂げている。わたしはそれを「神学的転回」と名づけているのだが、二〇〇七年の『王国と栄光』(高桑和巳訳、青土社、二〇一〇年)や二〇〇九年の『裸性』(拙訳、平凡社、二〇一二年)において暴き出されるのは、政治や法や美意識など、さまざまな局面において現代もなお、神学がいかに「世俗化」された装置として機能しているか、という点である。

しかもアガンベンの思考は、「世俗化」を確認するだけにとどまらない。もう一歩先、つまり「瀆聖」が求められる。なぜなら、たとえば主権のパラダイムが神の超越性の「世俗化」にはかならないという認識にとどまらざり、その権力自体は手つかずのまま残されるからである。「宗教としての資本主義」(ベンヤミン)と社会全般の「スペクタクル化」(ギー・ドゥボール)がますます進行する現代、つまり「世俗化」と「神聖化」とのあいだの区別がほとんどつかなくなっている現代において、「瀆聖」は喫緊の課題であると、アガンベンはいう。

聖フランチェスコとその修道会の理念について論じた近著『いとも気高き貧困』（二〇一一年）において、アガンベンは、かねてより彼に取り憑いていたアイデア、すなわち「所有」から「使用」へ、「豊かさ」から「貧しさ」への発想の転換をいっそう推し進めている。近代の政治と経済を支えてきた繁栄や利益の追求、所有や私有の思想が、徹底的に相対化されているのである。

エスポジトの射程

さて、フーコー譲りの「生政治」の思考が、アガンベンにおいて独自の展開を遂げたとするなら、アガンベンはまた別の道を模索している思想家として、もうひとり忘れてはならない存在がある。ナポリの政治哲学者ロベルト・エスポジト（一九五〇年生まれ）である。彼の著書もまた近年、各国の言語への翻訳が進んでいる。論文や講演を集めた『近代政治の脱構築』（講談社選書メチエ、二〇〇九年）、さらに「人格＝ペルソナ」の系譜を批判的に検証した『三人称の哲学』（講談社選書メチエ、二〇一一年）は、拙訳でわが国でも紹介されている。

エスポジトの思想の特徴をひとことで要約するなら、「生政治」を「共同体」や「免疫」の問題系へと接続させた、という点に求めることができよう。その成果は、トリノのエイナウディ社からたてつづけに発表された濃厚な三部作、すなわち『共同（コムニタス）その起源と運命』（一九九九年）、『免疫（イムニタス） 生の保護と否定』（二〇〇二年）、『ビオス 生政治と哲学』（二〇〇四年）のうちに結実している。

まずエスポジトは、語源にさかのぼってみようと提案する。たとえば「共同体」はこれまで、帰属意識や仲間意識、同一性や類似性といった観点から思考されてきたのだが、語源的にはむしろ逆の意味である、という。ラテン語の「コムニタス」は、「〜とともに」という意味の「コム」と、「贈与や捧げもの」あるいは「義務や負担」を意味する「ムヌス」からなる語で、それゆえ本来は、帰属や所有を意味するというよりも、わたしがあなたに負うべき何らかの義務を、つまりは潜在的な不在や欠如を表わしている。

それにもかかわらず、共同体の概念は、伝統的に、自己同一的な主体のカテゴリーに基礎を求め、それによっ

て守られ練り上げられてきた。エスPOSITが批判するのは、まさしくこの点である。集団の形式へと拡張された個として共同体をとらえるかぎり、この共同体は、あくまでも自己の固有性や所有権(領土、民族、言語、文化、宗教など)に閉ざされた個を志向することになる。民主主義、自由、主権などといった、西洋の政治的伝統の主たる概念もまた、ほとんどの場合この観点から論じられてきた。

だが、「コムニタス」とは本来、集団的な帰属の境界のなかに閉じ込めることで主体を護るものではなくて、逆に、自己の外へと主体を投げ出し、他者との接触や伝染に主体をさらすものだったはずなのだ。ところが、西洋の近代は、他者や外部にたいしてますますみずからを閉ざし、自己免疫化をはかろうとする傾向を強めてきたとナポリの哲学者は診断する。つまり、免疫ないし免疫化は、西洋における文明化の形式そのものとなってきたとすらいえるのである。

「ムヌス」に接頭辞「クム」がついてできたのが「コムニタス」だとすれば、「免疫」の語源となった「イムニタス」は、同じく「ムヌス」に、否定の接頭辞「イ

ン」がついている。つまり、他者にたいする義務や贈与において結ばれるのが本来の「コムニタス」であるとするなら、反対に「イムニタス」は、そのような義務や負担から構成員たちを免除するものとなるのである。こうして「イムニタス」は、危害を加える恐れのあるあらゆる外的要素にたいする防衛と攻撃というかたちで、政治的・医学的に発動されることになる。

もちろん、免疫システムは必要不可欠であって、それなくしては個人の身体も社会組織も存続は困難である。しかし、過度の自己免疫化が自己破壊を招くこともまた事実である。とりわけ九・一一以後、より大きな安心と自由を確保するという名目のもと、セキュリティの戦略が過度に作動し、より大きなコントロールが介入している。一方でいたるところに張り巡らされた監視カメラが、他方でますます高度化する先端医療や医薬品が、わたしたちの生の様態を規制し管理し、共通の幸福というアイギスの盾のもとで形成されるコンセンサスが、自由と抑圧、リスクとセキュリティとの境目をますます見分けにくいものになっている。

相反する力としての「コムニタス」と「イムニタス」、

それらにはさまれるようにして展開されるのが、エスポジトにおける「生政治」の思考である。生政治はもちろん、一方で生を保護し、保証し、増強させるという役割をもつが、他方では反対に、フーコーが暗示していたように、死の政治へと裏返る可能性を秘めている。先述したようにアガンベンは、この裏返りを、歴史的であつ論理的な必然とみなした。これにたいして、マイケル・ハートとの共著『〈帝国〉 グローバル化の世界秩序とマルチチャードの可能性』（水嶋一憲・酒井隆史ほか訳、二〇〇三年）において、ネグリが生政治の新たな可能性を積極的に評価したことはよく知られている。

アガンベンの悲観論とネグリのな多幸症、エスポジトが克服しようともくろむのが、この二律背反である。なぜこのような両極化が生じたのか。彼によれば、出発点であるフーコーに原因の一端はある。というのも、フーコーにおいて生と政治とが二つの異なる項としてまづ別々に前提され、しかる後に外在的に結びつけられているからである。そうすると必然的に、生政治は、生にたいする主権の過剰な行使とみなされるか（アガンベン）、それとも、主権にたいする生の過剰な潜勢力とみなされ

るか（ネグリ）といった具合に、正反対の方向へと分裂することになる。これにたいしてエスポジトが提起するのは、生と政治とはすぐれて内在的な関係にあるという視点であり、そのための重要な鍵概念となるのが、生物学的にかつ政治的な「免疫」だったというわけである。

生政治の系譜を丹念にたどったその著書のタイトルに選ばれたのが、「剥き出しの生」ないし生物学的な生を意味するギリシア語の「ゾーエー」ではなくて、これと対で、社会的な生を意味する「ビオス」という語であるというのには、それゆえ、きわめて象徴的である。アガンベンは、ビオスをゾーエーへと畳み込もうとするプロセスのうちに、生政治の闇を見たのだが、エスポジトによれば、ゾーエーはビオスの内的な差異とみなされるべきである。あるいは、すでにしてビオス化されていないゾーエーは存在しない、ということでもある。

その名「エスポジト」というイタリア語にはまた、「捨て子」という意味がある。さらに「エスポスト」は「さらされた」「負債を負った」という意味をもつ。名体を表わすというが、この「多孔性」（メンヤミン）の町ナポリの哲学者Ⅱ捨て子は、免疫化に抗い、外部へとみず

から(の思考)をさらに開こうと試みる。その思考からは
今後ますます目が離せない。

キリスト教をめぐる問い

「生政治」や「共同体」をめぐる問題とともに、とりわけ一九九〇年代に入って、議論が再燃しているように思われるのは、宗教(とりわけキリスト教)をめぐる問題系である。いかに神は死んだとしても、カトリックの大国にしてヴァチカンのお膝元ならではという、地政学的な要因がそこに働いていることは、おそらく否めないだろう。一方で、ポピュリズム的な教会回帰、他方で、キリスト教原理主義の台頭という状況を前にして、教義的にも強権的にも宗派的でもなければ、だからといって月並みの普遍主義や世界教会主義(エクメニズム)でもない、新たな宗教哲学が求められているのだ。アガンベンによる「神学的転回」も、かなり性格を異にするとはいえず、大きくはこうした文脈のなかでとらえることができるかもしれない。

「弱い思想」で一九八〇年代にさっそうと登場した

ジャンニ・ヴァッティモ(一九三六年生まれ)もまた(編著『弱い思考』上村忠男ほか訳、法政大学出版社、二〇一二年)、近年、キリスト教への発言が重なっている。そのことはたとえば、『キリスト教以後 非宗教的なキリスト教思想のために』(二〇〇二年)、さらにリチャード・ローティとの共著となる『宗教の未来 連帯・慈愛・アイロニー』(二〇〇五年)などといった著書に顕著にあらわれている。

ニーチェとハイデガーの研究から出発したヴァッティモは、近年の宗教回帰の現象において、必然性と危険性の両面が抱き合わせになっている点を指摘する。たとえば、科学とテクノロジーの著しい発達によって、とりわけ生命倫理の分野で、合理的な思考や論理だけではどうも解決のつかない深刻な問題——生と死、自己決定と運命とのあいだのヘラクレスの柱——にわたしたちは直面しているが、このことは、ある意味では必然的に、(それを神と呼ぶかどうかは別に)超越的なものの存在と向き合わされることになるだろう。だが、そこにはまた、神秘主義やドグマ的な信仰が忍び込むという危険性が潜んでいる。

現代におけるこうした宗教のヤヌス性はさらに、匿名

性の影に追いやられていた社会集団が、宗教の傘の下で自分たちのアイデンティティを主張する場合にも、その顔をのぞかせる。宗教をめぐるこうした状況を、哲学は自覚的に受け止めて批判的に思考しなければならぬ、宗教を回避してはならない、とヴァッティモは考えるのである。

それゆえ、哲学者はもはや「無神論者」であることを気取るわけにはいかない。ニーチェが「神の死」を予告したときですら、素朴に神の不在ないし無神論が宣告されていたと考えることはできない。なぜなら、絶対なるもののあるところ、たとえそれが神の不在であろうと、つねに形而上学が残ることになるからである。しかもヴァッティモは、教会にたいしても、一方的な批判をくりかえすことは慎もうと提案する。ちょうど芸術の運命にとって、肯定するにせよ否定するにせよ、美術館という制度との何らかの対決が不可欠であるように、キリスト教は、教会という制度と今後もわたりあっていかなければならないのだ。

キリスト教をめぐる問いに関連して、ここでぜひとも取り上げておきたい思想家がもうひとりいる。セル

ジョ・クインツィオ（一九二七―一九九〇）である。ヴァッティモやマッシモ・カッチャーリ（一九四四年生まれ）ら、キリスト教の問題を回避しようとしぬ多くの哲学者に大きな影響を与えた「異端の改宗者」である。その思想は、「神の敗北」を真正面から受け止めることから出発する。強制収容所のホロコーストに行きついてしまったキリスト教の歴史は、まさしく失敗の歴史、神の沈黙の歴史以外の何ものでもない、というわけだ。

この事実を認めないかぎり、キリスト教はふたたび現実逃避と自己正当化の暴力へと陥ってしまう、その深刻な危機意識が、クインツィオの強靱にして真摯な思考を支えている。ことによると、読者のなかには疑問を抱かれた方がいるかもしれない。いやしくもキリスト教徒でありながら、彼はなぜそこまで、信仰や救済の問題を否定的に思考しようとするのか、と。

その疑問にたいして、この現代の予言者はおそらくこう答えることだろう。信仰と不信仰、信じることと信じないこととのあいだには、絶対的な境界線など存在しないのだ、と。ほかでもなくキリストその人が、十字架上で神への不信——「どうしてわたしをお見捨てになった

のですか」——を思わず漏らしたように、信仰の核心には不信があるのであり、信仰とは、信じることと信じないこととの葛藤にはかならないのである。もしそうでないとしたら、信仰はみずからに安住し充足してしまい、何の疑いも持ちえなくなってしまうだろう。信仰の暴力なるものは、まさしくそこに起因するのである。

今日、クインツィオの思考が新たなアクチュアリティをもって響くとするなら、それはまさしく、宗教的な原理主義が政治や外交のいたるところで幅を利かせているからにはかならない（この重要な思想家については、拙著『イタリア現代思想への招待』講談社選書メチエ、二〇〇八年のなかで比較的詳しく紹介した。興味のある方は、そちらを参照願いたい）。

芸術と美の思想

最後に、イタリアの美学思想についても触れないわけにはいかないだろう。この国は何をおいてもまず、芸術の国である。そのことは誰にも疑う余地はない。美学、あるいは「アイステーシス」というギリシア語の語

源にさかのぼると「感性の学」は、まさしくイタリアの思想の存在証明そのものであるとすらいつても、けっして過言ではないだろう。二十世紀以降に話をかぎるとしても、詩学から政治学まで、あらゆる知を横断するベネデット・クロッチェ（一八六六—一九五二）の思想の出発点は、ほかでもなく美学にある。現代では、文学から哲学まで、およそあらゆる分野でその才能を発揮しているウンベルト・エーユ（一九三二年生まれ）が、このイタリアの伝統の良き後継者である。

だが、それだけではない。アガンベンもカッチャーリも、その領域横断的な思考の出発点はまさしく美学にあるのだ。アガンベンの一九七〇年の処女作『中味のない人間』（拙共訳、人文書院、二〇〇二年）、つづく一九七七年の『スタンツェ』（拙訳、ありな書房、一九九八年／ちくま学芸文庫、二〇〇八年）は、何よりもまず美学ないし詩学の本なのだが、すでにしてそこには、哲学や神学はもとより、政治や法などをめぐって展開されることになる問題系が、さまざまなかたちで先取されているのだ（詳しくは拙著『アガンベン読解』平凡社、二〇一一年を参照）。詩学と政治哲学の交叉はまた、ダンテ等を論じた『イタリア的カ

テゴリー 詩学序説』(拙監訳、みずす書房、二〇一〇年)にも詳しい。

さらにここで取り上げたいのは、『エニグマ』(拙共訳、ありな書房、一九九九年)や『無機的なもののセックス・アピール』(拙共訳、平凡社、二〇一二年)などの著書で知られる、マリオ・ペルニオーラ(一九四一年生まれ)である。アガンベンとほぼ同じ世代で、一九六〇年代には両者に交友のあったことは、それぞれの口から聞いたことがある。しかも、エーコやヴァッティモとともに、同じトリノ大学で異色の美学者ルイジ・パレイゾン(一九一八―一九二)の薫陶を受けたという経歴をもつ。その二人と同様、ペルニオーラもまた、美学にフィールドを置きつつ、芸術のみならず、文化や社会、政治や宗教などは幅広い領域にわたって、積極的かつアクチュアルに発言や著作を重ねてきた。

ペルニオーラの思想をひとことで要約するとするならば、「通過」ということになるだろう。イタリア語で「トランジット」、英語の「トランジット」に相当する。飛行機の乗り継ぎのことがすぐに連想されるかもしれないが、この語にはまた「あの世への旅立ち」、つまり「死」の

意味もある。日常的にも使われる語をあえて呼び出すことで、この美学者が模索するのは、ヘーゲルによる弁証法的総合とも、ハイデガーによる形而上学の超克とも異なる第三の道である。問題は、総合でも超克でもなくて、あくまでも「同一物から同一物への移動、通過」なのだ。「通過」は、けっして垂直軸の方向——たとえば神や「(大文字の)他者」のような——になされるのでも、対立物の総合という形式をとるのでもなく、どこまでも水平の方向にスライドしていくようになされる。もちろん、その方向性は一定のものではないし、引き返しや軌道修正も可能である。「通過」の究極にある死もまた、上方(天国)や下方(地獄)でわたしたちを待ち受けているのではない。それは、あくまでも「通過」と同じ平面上で起こる。それゆえ「通過」とは、日々のささやかな死の準備のことである、といいかえることもできるだろう。

このように、「通過」は一気に一挙に他のものへと向かうわけではないが、わたしたちのうちに変化と非同一性への扉をいつも開いてくれている。感性と想像力——それゆえ芸術——の豊かな可能性は、超越性や過激性のうちにはなくて、このささやかな「通過」のう

ちに求められるのだ。

さて、そろそろ筆を擱くときがきたようだ。ことによるとイタリア人は、わたしたちとはまた別の時間を生きているのではないか。彼らと付き合っていて、しばしばそう思えてくることがある。これは何も、総じて彼らが時間にルーズだから、という理由だけによるわけではない。彼らは、たとえば多くのアメリカ人や、そして今や私たち日本人もまたほとんどがそうであるように、もっぱら現在と未来だけに目を向けて生きているのではない。過去は彼らにとって、現在という時間と切り離して考えることはできない。

ヴァールブルクのな言い方をするなら、おそらく太古以来の記憶の痕跡が、さまざまなかたちでそれと気づかれないまま、彼らの身体そのもののうちに深く刻み込まれているのだ。それはちょうど、ローマという町が、バフチンのいうクロノトポスさながらに、複数の時空をポリフォニックに響き合わせているのにも比することができるだろう。アナクローニー(時代錯誤)とヘテロトピー(混在郷)、それこそイタリアの思想の特徴でありつづけている。アクチュアリティは、アナクローニーゆえに発揮

されるのだ。その不思議なパラドクスにこそ、おそらく、イタリア的ダイモンとその申し子たるこの国の現代思想の最大の特徴と魅力が隠れている。

岡田温司(おかだ・あつし)

京都大学大学院教授。専攻は西洋美術史。著書に『もうひとつのルネサンス』人文書院・平凡社ライブラリー、『モラン・デイとその時代』(吉田秀和賞)人文書院、『マグダラのマリア』中公新書、『フロイトのイタリア』(読売文学賞)平凡社、訳書にロベルト・ロンギ『芸術論叢・全二巻』(監訳)ピーコ・デッラ・ミランドラ賞)中央公論美術出版社、ジョルジョ・アガンベン『開かれ』(裸性)(共訳)平凡社 ほか多数。

15分で読むイタリア現代思想・ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
以文社	4753102532	ホモ・サケル	ジョルジョ・アガンベン／高桑和巳訳	3,500	2003
月曜社	4901477000	アウシュヴィッツの残りのもの	ジョルジョ・アガンベン／上村忠男・廣石正和訳	2,400	2001
筑摩書房	4480790460	社会は防衛しなければならぬ	ミシェル・フーコー／石田英敬・小野正嗣訳	4,800	2007*
岩波書店	4000018173	残りの時：パウロ講義	ジョルジョ・アガンベン／上村忠男訳	2,800	2005
青土社	4791765331	王国と栄光	ジョルジョ・アガンベン／高桑和巳訳	3,800	2010
平凡社	4582703429	裸性	ジョルジョ・アガンベン／岡田温司・栗原俊秀訳	2,600	2012
講談社選書メチエ	4062584517	近代政治の脱構築	ロベルト・エスボジト／岡田温司訳	1,800	2009
講談社選書メチエ	4062584920	三人称の哲学	ロベルト・エスボジト／岡田温司監訳	1,700	2011
以文社	4753102242	〈帝国〉	アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート／水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳	5,600	2003
法政大学出版局	4588009778	弱い思考	ジャンニ・ヴァッティモ、ビエル・アルド・ロヴァッティ編著／上村忠男・山田忠彰・金山準・土肥秀行訳	4,000	2012
講談社選書メチエ	4062584166	イタリア現代思想への招待	岡田温司	1,500	2008
人文書院	4409030691	中味のない人間	ジョルジョ・アガンベン／岡田温司・岡部宗吉・多賀健太郎訳	2,400	2002
ちくま学芸文庫	4480091314	スタンツェ	ジョルジョ・アガンベン／岡田温司訳	1,400	2008
平凡社	4582703412	アガンベン読解	岡田温司	2,400	2011
みすず書房	4622075103	イタリアのカテゴリー	ジョルジョ・アガンベン／岡田温司監訳	4,000	2010
ありな書房	4756699572	エニグマ	マリオ・ベルニオーラ／岡田温司・金井直訳	3,600	1999
平凡社	4582703436	無機的なもののセック ス・アピール	マリオ・ベルニオーラ／岡田温司・鱈江秀樹・蘆田裕史訳	2,900	2012

*は、品切の可能性がります。

公立図書館における人文書の配架についての一考察

吉野友博

「今泉棚」の衝撃

あの伝説の「今泉棚」の御本人、今泉正光(平安堂長野店)さんのお話を直に伺ったのは、2011年2月25日、場所は神保町の岩波セミナールームでした。

質疑応答の時間になり私は、「今泉さんにとって図書館はダメな存在なのか?」と思いきって訊きました。これに対して今泉さんは「図書館はNDCに依存しているからダメなんだ。NDCをぶつつぶさなければ図書館は救われない」と超過激な発言をされました。それまで、「NDCは不十分なところもあるので、工夫改良すれば何とかすむ」程度に軽く考えていた図書館員

である私には、どつかれるような衝撃の一言でした。それを契機に図書館と書店の相違、図書館の配架と書店の棚揃えの問題を考えてきたのです。

本稿では、図書館の蔵書で重要な一部分を占める専門書、とりわけ人文書の配架と棚揃えの関係について、図書館がなぜ編集者、書店員、読者の意に叶わないのか、現状とその原因、改善策などについて考察、提案するものです。

書店の人文書の棚作り学ぶ

人文書を探し、読者が新たな発見を得るのは、書店の棚からです。

朝日新聞社による全国世論調査(2012年10月13日)によれば、本の情報を「書店で知る」が59%、「図書館で見える」が11%、本の入手は「大型書店から」68%、「小規模書店から」35%、「図書館で借りたり、読んだり」21%と、人文書にとっては書店が本の出会いの場となっています。一方で、図書館は無料で利用できることもあって貸出しは急増していますが、本、なかでも人文書のような本を求める読者からは依然として「図書館にはちゃんとした本が揃っていない」などと当てにはされていません。だからこそ、図書館の配架も選書も書店の棚づくりからもっと多くを学ぶべきであると考えます。

図書館の「NDC」と書店の棚揃いの類型

今泉さんが解体対象としたものは、現在、ほとんどの公立図書館で採用されている日本十進分類法(NDC)です。

NDCとは一九二九年に森清氏がアメリカのデュイ式十進法を日本に適用して、『日本十進分類法』として出版したのが始まりで、戦後は日本図書館協会が継承し

て一九八五年に新訂九版を重ねているものです。

基本的には、0から9までを使用した階層構造になっています。たとえば、最上位の一次区分(1)類・哲学宗教―二次区分(12)綱・東洋思想―三次区分(121)目・日本思想―四次区分(121.6)分目・近代日本思想―五次区分(121.63)厘目・西田幾多郎というように細分化して、内容によっては、たとえば、(10)史などの形式区分、(121)日本などの地理区分、(11)日本語などの言語区分、(121)日本語詩などの言語共通区分および文学共通区分を活用して、上位から下位に展開して細分化していきます。

ここでNDCによる配架と多くの書店の棚揃えを比較して私なりに類型化してみよう(次頁表参照)。

多くの書店では、叢書や新書はまとめて同じ場所に置いてあります。しかし、NDC配架には叢書・新書をまとめるという概念がそもそもないため、本の主題によってバラバラに配架されることとなります。ただし、同じ主題で入門書から専門書までが並ぶことになるので、読書が入門書から専門書に移行しやすいという面はあります。

NDC

棚揃え

叢書・新書

解体・単品

コンセプト・集合

かたち

ラベル等で隠す

かたちを生かす

場所

通常一箇所

複数可

学問体系

区分ごと分断

関連領域集合

キーワード

区分優先・拡散

集中・統合

著者

作品ごと分散

集中・集合

流動性

蓄積優先・固定

流動・柔軟

拡張性

なし

あり

入門書専門書

一箇所に配架

新書叢書は別

読者イメージ

バラバラ

面白い・分かる

熟練した書店員は図書館のようなラベルがなくても、どの棚に何があるかを把握していますし、読者も書店の検索機でタイトルや著者名を検索して、棚コードを見て探し出すことができます。だとすると、図書館の本になぜラベル⇨配架場所を表す記号が不可欠なのか、理解しにくいところです。しかも、図書館のラベルは未だに3段式を使っているところも多く、これでは背の情報が相当隠れてしまいます。2段式にしても、なぜ、(913.6)日本小説と(7)藤沢周平など著者記号を2段にする

必要があるのでしょうか。日本小説なら、著者記号の1段ラベルで十分でしょう。利用者にとって(913.6)日本小説の分類番号に何の意味も見出すことができないでしょう。

本の置き場所も、書店は読者の関心とテーマに応じて複数の場所に並べますが、図書館は通常一箇所です。図書館でフェアをやるときは書誌データの書架区分を変更するとともに、見た目で分かるように色シールを貼って移動させて展示します。

また、図書館のNDCは同一主題を集中させるといわれますが、常にそうなるわけではありません。まず主題といっても、過去の分類の継続が重要だ、との理由で、三次区分まで完全に埋まってしまい(空番がちよっとはあるものの)、三次区分すなわち学問体系を変えることはありません。これは時代が変わっても、変えようがありません。過去の改訂でも、新しいテーマには細分類を継ぎ足して凌いできましたし、体系を根本的に変えるようなことはしていません。

たとえば、哲学・思想に関連深い「政治思想」は(3類社会科学―(31網)政治―(311目)政治学・政治思

想に、「言語哲学」は(8類)言語―(80網)総記―(801目)言語学―(801.01厘目)言語哲学に分類されます。歴史と密接不可分な民俗学・文化史が(3類)社会科学―(38網)風俗習慣・民俗学―(382目)民俗誌、(389目)文化人類学・民族学に、社会学の分野である「ナシヨナリズム」は(31網)政治―(311目)政治学・政治思想にほとんど、環境社会学は(5類)技術・工学―(51網)建設・土木―(519目)環境・工学に分類されています。そもそも、(36網)社会学・社会問題、(37網)教育、(38網)風俗習慣・民俗学、(39網)軍事・戦争がなぜ、(3類)社会科学に含まれるのでしょうか。このように一旦当てはめたら変えようがないとしか思えないものです。

また、2011年3月11日の東日本大震災とその後の原発事故についても、書店では当然のことながら東日本大震災・原発事故の棚やフェアを組み、関連書が並べられています。一方、図書館のNDC分類では、以下のようバラバラに配架されることになります。

(210.1853) 日米核原子力協議。

(369.31) 震災、(453.212) 東日本大震災、(453.38) 地震予知、(453.4) 三陸大津波、(492.4) 放射線医学、(493.92) 小児がん診断、(498.54) 放射能と食品の安全。

(501.6) 自然・代替エネルギー、(518.52) がれき処理、(518.87) 防災計画、(519.9) 防災工学、(539.09) 原子力産業、(539.2) 原子炉、(539.68) 放射線障害、(539.68) 除染、(540.9) 東電、(543.5) 原発、(544) 送電自由化、(916) 事故や避難体験記

せめて、個々の分類を集めて色シールを貼るなどして特集棚を作り、維持し続けるべきでしょう(ちなみに私たちの図書館では独自配架分類方式により、極力、453.2 震災、519.9 原発関係に集中しています)。

このように、NDCは「過去の累積優先・固定」で、流動性や拡張性のない分類法です。ついでに言うと、分類の不十分さを補うための棚見出し板や差込式分類・著者見出しも図書館では、棚に応じて自分で作成するものが少なすぎます。大多数がNDCの文言を印刷したもの

です。その結果、読者にとって図書館のようなラベルがない書店のほうが「面白い・分かる・探しやすい」、図書館のほうは「バラバラ・変・分かりにくい・探せない」となるのです。

大方の図書館は自分で分類を考えない

具体的な事例を説明する前に、そもそも、誰がどこで分類を付けているのでしょうか。

日本の公立図書館のほとんどは、NDCや件名の付いている民間の書誌データMARCを買って図書館システムの本誌データベースに取り込んで使用しています。最近ではJAPAN-MARC(国立国会図書館)をダウンロードして使う館も増えてきています。最も公立図書館のシェアが高いのがTRC-MARC(図書館流通センター)、その他、NS-MARC(日販図書館サービス)、T-OHAN-MARC、OPL-MARC(大阪屋)などがあります。

図書館員はMARCを買うだけで、自分で書誌データを入力することもなく、一部の館を除いて(請求記号≪独

自配架分類を職員が付けているところは極少数になっています)、自分で分類を考えもしないで、装備込みで納品されたら機械的に受入作業して新刊棚に配架して終了、返却配架は窓口委託によるというところが主流になってしまいました。

キーワードや著者別棚の必要性

「キーワード」は配架を考える上で重要な基準です。

現代哲学・思想の重要なキーワードとして「構造主義」と「ポストモダン」があります。これらを理解するのに必要と思われる書物に、ソシュール『一般言語学講義』(言語学)、レヴィーストローズ『野生の思考』『構造人類学』(文化人類学)、ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』(論理学)などがあります。

レヴィーストローズの主要な著作なら分類上「文化人類学」と大方見当はつきますが、言語学が語学と一緒の棚、しかも(1類)哲学・思想とは遠い(8類)言語と一緒にされるとは、読者の誰しもが想像がつかないでしょう。『一般言語学講義』は構造主義を考える上で欠かせない

著作であるにもかかわらず、です。

最近の「尖閣諸島・竹島」問題もそうです。

キーワードでは「尖閣・竹島―日本の国境問題」になるでしょう。しかし、NDC上では、(210. 1821)日韓外交史、(210. 1822)日中外交史、(217. 3)島根県誌、(319. 1021)日韓外交史、(319. 1022)日中外交史、(329. 23)領土問題にバラバラになってしまいます。NDCを独自に解釈して使う独自配架分類を実施しないと、バラバラのままになってしまい、この手の本を棚で発見できないことにもなりかねません。特集コーナーは結局は時限措置なので、話題がおさまると元の場所に配架されてしまいますから。

もうひとつの重要なポイントであるキーパーソンについて触れますと、現在、多くの書店では吉本隆明フェアや内田樹フェアを組んでいます。吉本隆明『共同幻想論』は今更申すまでもなく日本思想界に大きな衝撃を与えました。親鸞論、ヴェイユ論、状況への発言、詩集、漱石論、母型論など激しい筆法はあらゆるジャンルに及び、戦後思想における「知の巨人」として没後もその影

響は大きい人です。

書店の棚では、吉本隆明の著作を分野ごとにばらしましませぬ。図書館のNDC配架には、「著者別」という概念はありません。すべて内容や表現形式に沿って分類され、この思想家の著作をバラバラに解体してしまうのです。

今日一番人気の思想家といえば、内田樹です。この人の著作についても、『街場の文体論』は(801. 6)文章論、神戸女学院大学の退官時の最後の感動的な名講義を収録した『最終講義』が(914. 6)評論、中沢新一と日本人論、宗教論、学問論、原発、日本の将来など知性と知性が真剣勝負した『日本の文脈』が(914. 6)評論か(304)社会時評と、著作の内容を省みることもなく、いとも簡単に形式的に分類されてしまいます。

多くの大型書店では重要な哲学者・思想家の棚見出しが作成されています。他の哲学者の研究書は研究者の棚に置き、明らかに他の特定分野の本を除き、著者別の棚にすることで日本の戦後・現代思想全体を俯瞰することができるようになっています。

逆に人物ごとの棚にするとその分野が却って俯瞰でき

ないものもあります。それは、伝記の類です。NDCでは(289)個人伝記には「ここには、個人の伝記および伝記資料一切を収める。ただし、哲学者、宗教家、芸術家、スポーツマン、諸芸に携わる者および文学者(文学研究者を除く)の伝記は、その思想、作品、技能などと不可分の関係にあるので、その主題の下に収める」(『日本十進分類法 新訂九版本表編』日本図書館協会 110ページ)と説明されていますが、では戦国武将はどうなのでしょう。たとえば、豊臣政権や関ヶ原の研究に石田三成の行為、事跡、性格など人物研究は欠かせません。ドイツ現代史にヒトラーの『わが闘争』は必須資料です。民俗学の父とも称される柳田國男の研究も同様に欠かせません。政治家だってそうです。教育学者だって。特定分野だけの伝記がその思想と不可分の関係にあるのではなく、基本的にはすべての分野に涉って個人の思想、事跡が不可分の関係にあります。人間を研究する人文科学にあつては特に言えることです。ですから、個人の伝記や研究は基本的にはその主題に含める必要があるのです。すべては本を生かす、棚を生かすため、読者のために分類が存在するのですから。

図書館における配架——すべては棚のために

これまででは、書店の棚づくりと図書館でのNDCに基づく配架分類の比較、NDC分類の不十分さとその原因について考えてきました。しかし、いくらNDCが十分だからといって、NDCを全否定することはできません。それに代わる制度が今のところ構築できないからです。仮に数字をアルファベットにしたところで、十進が二六進に増えるだけで、階層構造そのものは変えられません。書店の棚コードのようなものができれば良いのですが、図書館の場合、大量に借りられてまた返却されるすなわち元の棚に戻る、モノの移動の量が激しすぎるので、配架場所を表すラベルⅡ配架記号が、それも単純明快な記号がどうしても必要となります。

すべては棚のために、顧客(図書館では利用者といいます)のために、図書館の本は存在するので、現実的にはNDCを工夫改良して使うしかありません。

では、私たち図書館員はどうすれば良いのか、すでに私たちの図書館で実行していることを踏まえ、改善案を

提案します。

第一に、自分で配架分類を考えてみる事です。委託制度や職員体制など困難な条件も多いとは思いますが、難しそうな本を手にとって、MARCで付いてくるNDC分類って、これでいいのかどうか、できる条件で考えてみる事からはじめませんか。今の若い職員は、図書館では目録規則に沿って目録カードを自分で書いて、コピーを取って書名目録、著者名目録などを繰り込んでいたことを知りません。司書過程の演習では分類とかNCR(日本目録規則)とかBSH(基本件名標目表)とかを少しは習ったこととは思いますが、実務を経験していないと身につかないはずです。書店員だってスリップを並べて売れ筋の傾向を掴む作業を、つい最近までやっていました。「身体性」というか、人間は、書くとは結構覚えるものです。分類を考えるために、帯、奥付、前書き、目次を読み、悩むと類書の分類を見たりして付けて、ぴったりはまると達成感を得て、その本を全部読めた気になるものです。若い人たちは、「昔は牧歌的だったからできた」と言うかもしれませんが、昔も今も忙しさはそう違

いはありません。そんな中でも時間を作って身体に染み込ませてきたのです。昔の目録を書く作業やカードの繰り込み作業だって、それはそれで大変な労力でした。現在のほうが書誌データも予め入力されていて、検索手段も速度も昔とは桁違いに恵まれています。しかしその分、「触って、書いて、覚える」ことが希薄になっているかもしれません。

第二に、毎日の「棚更新」(書架整理ともいいます)の重要性です。NDC配架分類によれば、同じ分類に新書も叢書も伝記も研究書も専門書も並びますが、判型を合わせ、新書は出版社ごとにする、同じ判型で叢書ごと著者ごとに並べる、これを毎日重ねると、同じ著者が出版社別に書く内容が異なる、棚見出しが足りない、他の内容の本に比べて蔵書量が少ないなど、様々なことが分かるようになります。当然のことながら本の動きも掴めるようになります。特に見出しは読者が本を探す上で重要なものであるのに、NDCの用語のままでは、分かりにくい。日本語として分かる言葉にしなければなりません。また、NDCでは同じテーマやキーワードでも場所が離れてい

る場合が多いので、たとえば、「↓○○の本は○○○にもあります」などの参照見出しを作りましょう。

第三に、「カタチとしての本」を生かす装備にしましょう。3段ラベルだと、貴重な背の情報を隠しすぎです。1段で十分です。帯も付けたままフィルムコーティングするか、必要な部分を切って見返しに貼り付ける、全集の月報を閉じこむ、全集の内容書名を背に書き付ける、型紙は袋に入れて本に貼り付ける、箱に入れて出すなど折角の製本装丁を生かし、カタチとしての本の価値を守ることが必要です。

第四に、「展示」ということです。本は電子データとは異なり、製本装丁によるビジュアルなものであり、カタチです。本は、著者、編集者、デザイナー、印刷製本部門の担当者、営業、取次などすべての人の、読者の目に留まってほしいという想いが凝縮されているカタチとしての存在です。展示はその本にいのちを吹き込むという仕事です。面出し、平積み、書架地図、POP、サイン、フェア、お薦めコメント、本の紹介、ブックリス

ト、パスファインダ、イベントが溢れており、棚は動いていますし、活動しています。選ぶのに苦労し、分類に頭を悩ました本が利用者の「interest」にびったりフィットし、読まれて、利用者が他の本にも手を出してくれたり、本と本に関わる人も生かされ、図書館員冥利に尽き、自分も生かされるのではないでしょう。

第五に、可能な限り配架位置を変えてみませんか。ND Cの0類から順番に並べている図書館はどこにもありません。大方は小説や(59網)家庭実用書を入口近くや一番目に付くところに並べています。施設上の制約もありますが、利用者の導線に合わせて、(49網)医療・闘病記を入口手前に置く、人文・社会ゾーンに(1類)哲学・心理・宗教、(2類)歴史の次に(30網)社会、(36網)社会学・社会問題、(37網)教育、(38網)民俗、(39網)戦争と軍事を並べる、政治法経書ゾーンに(3類)社会科学の中の(31網)政治から(35網)統計までと次に(6類)の産業を並べるなど、ゾーン構成を変えるのも良いでしょう。

最後に、NDCを独自に解釈する部分を加えて、独自配架分類を試みることで。実際に闘病記などは疾病名ごとの分類表が多く使われています。

私たちの図書館では、1989年以来、次のような独自配架分類を実施してきました。その後の追加変更を含め、概ね、①(59網)家庭実用書以外の生活実用書、たとえば、年金、日常の法律、受験案内、住宅、インテリア、園芸、ペットなど生活実用書を別置する。②家庭実用書を集中し、ファッションに関するものは(593.x)に、美容・ダイエットに関するものは(595.x)に、食品・食べ歩きなど食に関するものは(596.x)に、妊娠出産・子育てに関するものは(599.x)に集める。③小説、エッセイなどは作家別に著者記号だけで並べる、たとえば、藤沢周平の作品はフシで配架する。④クルマに関するものは(685.x)に、鉄道・路面電車に関するものは(686.x)に、飛行機に関するものは(687.x)に集める。⑤個人伝記は戦国武将の伝記は戦国史に含めるなど主題別に配架する。⑥その国を知るために、(302.x)各国事情と(29x)各国の紀行を各国史の現代史・紀行に含める。⑦戦争の記録、戦記は(391.x)

に、平和や広島・長崎の原爆に関するものは(393)に集める。⑧広く環境問題を集め、(519.x)で展開する。たとえば、原発・放射線・除染関係は(519.9)へ、などです。現在は、医療健康情報サービスやビジネス仕事支援サービスなどに関連させてさらに全面的に見直そうとしています。

現在問題になっている「尖閣・竹島」など領土問題は、北方領土を含め今後の重要な政治課題です。(319.1)日本の外交問題そのものの重要な課題ですので、ここに集めるほうが他の関連本との比較で問題や論点が分かりやすくなります。

次に、哲学・思想に関連する言語学は(1類)哲学・思想の空番(119)に移す。さらに、西洋哲学の個々の哲学者・思想家の著作は、概論や包括的な入門書、解説書を除き、著者別に哲学者研究も含めさせる。そして、日本の戦後・現代思想は(121.7)を新設して、特定分野や他の哲学者の研究などを除き、基本的に著者別に集める。

こうした分類が、人文書の読み方になつた配架になるのではないのでしょうか。

分類・配架の他にも、本をどう選ぶのかという選書の問題、それをどう購入するのかという出版流通も大きな問題です。さらに、図書館員に読んでほしい各分野の基本書リストづくりも必要です。これからも、これら多くのことを考察していきたいと思います。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。

吉野友博(よしの　ともひろ)

L (Librarian) & P (Publisher) の会世話人、社団法人日本図

書館協会会員、図書館問題研究会東京支部会員、荒川区立南

千住図書館勤務。関心テーマは出版流通、選書論、書評論、

読書論、格差社会問題、脱原発、現代思想など。

二〇一二年研修旅行報告

福島・宮城・岩手(十月十七日～十月二十日)

広報委員会 根井浩一(平凡社)

2012年秋の研修旅行の行き先として東北の3県、福島、宮城、岩手と決まったのは、5月の連休明けのことだった。その時点で、東日本大震災が起きた3・11から1年と3カ月が経っていた。会として東北を訪問するには少々時間が過ぎてはいないだろうか？ との意見も出たが一方で、年初の出版五団体新年会で福島、宮城、岩手の書店さんをお招きした記憶が強く残っていた。大震災と福島原発事故へのお見舞いと励ましの言葉をおかけし、さらにはこの間、我々出版社が逆に勇気をいただいたことに感謝を伝えようとの意味がああの新年会にはこめられていた。だから今度は我々がお伺いする番だとはいう考えが出たのは自然だったように思える。

そういえば東京で開かれた別のある会合で福島から

やってきた書店さんがこう挨拶していたのを思い出す。「私たちは2回傷つきたくない。地震やその後の原発事故の現実的な被害が1回目、そしていずれ皆に忘れ去られていくことの悲しみが2回目の傷だ。それは耐えられない。あの惨劇と悲しみを記憶の外に追いやらないで欲しい。風化させないで欲しい」と。あの時以来、少ない出版社が東北に出かけていった。そして「いい本を作って我々に届けて欲しい。だからあなたたち出版社は東京で頑張ってくれなくては困る」と私たちは背中を押された。結果を言えば「今回東北に行って本当によかった」と、人文会の誰もが帰京して思った。なぜなら、遅すぎるといふことなどはないことがわかったから。そう思わせてくれた東北研修旅行だったのである。

ところで、いつもの人文会の研修旅行報告のスタイルは、実際に訪問した書店さんでの人文書販売の取り組みや、その地域の書店業界の事情などをメインにレポートしている。しかし今回は3・11後の東北の「書店と本と

人」にまつわる事情や表象を記していこうと思う。

初日に訪れた福島市の西沢書店さんは今年創業103年を迎えた老舗。去年の3月11日はくしくも102年目の創業記念日だったという。大町店の半澤店長、北店の佐久間店長それに小林常務に迎えを受け。小林常務はこう言われた。「大町店も北店も再オープン後は活字を求める人で大賑わいでした。秋には浜通り(福島県の太平洋に面した地域)の被災地の小中学校に本を贈ったことがあり、〈悲しくなったとき、本の力で乗りこえることができました〉と子供たちから手紙をもらった時は感動しました。私たちはそこに本を置き、本を届けるのが仕事。震災本コーナーには放射能は危険だという本と大丈夫だという本の両方を並べています。どちらが本当なのか我々にもわからない。両方の情報を読者に伝えるのも書店の役割だと思っております。」西沢書店は〈へありがとう故郷、ありがとう福島〉というコピーを刷り込んだ美しい葉を作り配布している。

2日目の午前中お伺いした紀伊國屋書店仙台長町店の後藤店長は3・11の時、お店にいた。そのときの様子を昨年の人文会ニュース(111号)に「東日本大震災から

の復帰と道のり」と題して寄稿してくれた。生々しい文章だった。

「3月11日14時46分からの数分間、店の中の様々なものが崩れていくのを見ていましたが、従業員とお客は落ち着いていました。数分後には棚から落下した書籍で一面が埋め尽くされてしまいました。店内は停電で非常灯だけの暗闇になったにも拘わらず一人もパニックに陥ることなく激しい余震の続く中を肅々と全員が建物の外に脱出することができました。」続く文章の中で、その後も従業員の安否の確認がしばらくとれずやきもきしたと、仙台市内では早朝から水、食料、物資を求めて長蛇の列をなして3、4時間も並ぶ生活を強いられたこと、家族総出で買い出しにあたらなければならなかったこと、店舗再開の4月28日まで雑誌のバックナンバーの調達などを含めて商品の手当てに相当な苦勞をしたこと、などが綴られていた。私たちが訪問したときは明るい表情で出迎えていただいたが、昨今の売上の厳しさには心を痛めている様子だった。

さて、これは東京、ジュンク堂書店の工藤社長の話。「3月21日、丸善仙台アエル店を再開させた際、こんな

非常時に商売をやってもいいのだろうか？ と正直思った。しかし、早く開けてくれてありがとう、という状況の中での売上は凄かった。続けて4月3日にジュンク堂書店ロフト店を開けたわけだが、水や空気が無くなるのと同じような危機感を、本に対しても人々は抱いているのではないだろうかと感じた。それは阪神淡路大震災のときにも感じたことだし、新宿店を閉めるときもそうだった。」仙台駅周辺には、丸善さんと3つのジュンク堂書店さんがある。訪問したとき応対してくれた人文書担当の坂入さんは、「震災後数カ月は人文書のハードカバーもよく売れた」と仰っていたが、当時のことがよく伝わるエピソードだ。長町の紀伊國屋書店さんも、仙台駅前のジュンク堂書店さんや丸善さんも一様に言うのは、震災後に再開してからのしばらくの間は報道写真集などを中心に震災需要で凄まじい売上があったが、それも夏場までで秋過ぎからは景気に影が落ち始めたということだった。これは仙台市の書店さんだけではなく、福島でも郡山でも盛岡そして石巻でも異口同音に言われたことだった。

仙台市では2つの大学生協さんを訪問した。青葉区川

内にある東北大学生活協同組合文系書籍部と、泉区にある東北学院大学生生活協同組合泉店だ。いまだきの大学キャンパス内の店舗はおしやれで明るい。書棚もプラットフォームやすくレイアウトされている。東北大学ではポピュラーサイエンスや人文系書籍のフェアが、東北学院大学ではAERAMック『東北学院大学』の大きな面陳列が目を引いた。東北学院大学生協の五十嵐副店長は我々にこうリクエストした。「自社商品の営業だけではなく、余所で売れているものがここになかったり、他店で好評の関連本などの情報を積極的に教えて欲しい。」定番だけでは棚が活性化しない、やはりお客を繋ぎとめるには新刊と独自の選書が必要なのだとということなのだ。また、東北大学生協の小早川さんが人文の棚が震災の影響でずれてしまったまま直せないといって苦笑していたの思い出す。彼女は3・11からのことを、「本を必要としてくれる人がいる限り」というタイトルで『聞き書き震災体験 東北大学九十人が語る3・11』（新泉社）という本に寄せている。こんな感じだ。「終わりまであと十ページというところで九時半の消灯時間になってしま

読む、なんてこともあった。明るいうちは職場に行き、書籍以外の仕事をして夜は避難所で本を読むという生活をしてきた。自宅の倒れた本棚から未読の本を持ちだし、1日1冊くらいのペースで次々と読んでいた。」

どうして人は本を必要とするのだろうか？ 水や空気と同じように人は本を必要としていると言われた先の工藤社長の言葉が思い出される。彼女は震災地の読者の一人でもあったわけである。

3日目は、盛岡市。朝一番、郊外の広大な土地に建つショッピングセンターに東山堂イオンモール盛岡南店を訪ねたあと、市中心部の東山堂本店へ。4階の事務所に通していただき、玉山社長にお話を伺う。「昨年の4月5月頃はもの凄い勢いで本が買われていた。ギフトラッピングなど1時間で数十万というときもあったほど。しかしそれも今年に入って落ちついた。」東北の被災地の人たちに対しては「冷静に長い目で支援をして欲しい」と言葉を続けられた。また、我々出版社への注文として、メガ書店やネット書店ばかりに目を向けずに、地方の書店との取り組みを強化して欲しいことを話された。ネット書店、メガ書店に確かに

我々の意識は働く。しかし地元を読者を大切にする地方書店との繋がり構築に我々の先輩は力を入れてきた。現在でもそこを抜きにしては良書の普及も語ることはできない。玉山社長の言葉は胸に刻まなければならないだろう。

この後、さわや書店本店、ジュンク堂書店盛岡店と訪ね、昼に美味しい冷麺を食べたあと、J.R盛岡駅ビルにあるさわや書店フェザン店にお伺いした。このお店はツイッターを活用して(何と6000人近いフォローワーがいる)本やイベントやフェア、地元のネタなどを全世界に(一)発信している。全国の書店からも、我々出版社も大いに注目している元気な本屋さんだ。この日我々が伺いしたときも、外の通路に面して模造紙大の紙に手書きで描かれたアイ・キャッチが通る者の目を引き、それを背に魅力的に本が並べられていた。そこには3・11の関連書がガツンと積まれ、各タイトル3桁の数字を販売しているとのことだった。

ここまでの3日間で人文会の東北3県の研修旅行は一区切りなのだが、実はオプションの4日目があり、希望者を募って実際に津波の被害に遭われた沿岸の都

市に行ったのだった。その4日目の石巻市の話を記そう。JR石巻駅を降りてまず向かったのは高台にある石巻市立図書館で、今野館長にお話しを伺った。

「あの日、3月11日はもちろん開館中でした。地震があり、一度外に避難したお客が津波の来襲とともに館内に戻られて、そのまま建物は避難場所として使用することになりました。その時211人ほどの人がいらっしやいました。5日後に食料の第一便が来るまでは、被害を免れた市内の商店から食料を供出してもらい日々を凌いだのです。5月中旬になり、館内に留まる人が50人を切ったところで1階部分の図書館業務を再開しました。避難所としての役割を終えたのは最終的には10月8日。石巻市の図書館は本館1、分館6、そのうち2つは津波で中身が流されてしまいました。昨年のうちに移動図書館を復活させ、50箇所ほどの仮設住宅団地を巡回しています。震災復興が優先であるから図書購入までお金が回ってきません。いまはまだ我慢の時だと思いますが本が買えない現実の中、図書の寄付はありがたいです。」と話されていた。外に出ると陽気のよいのんびりとした土曜日の昼前で、本当

にこの地に大厄災があったのだろうかと信じられない思いだった。図書館を後にした我々は市中心部にある日和山公園に行き、その山の上に立って北上川河口から海岸方面を眺めた。そこにはかつて民家や水産加工の工場があつて、当たり前前の生活が繰り広げられていた土地であつたろう。しかし本当に何もなくなつてしまつていた。

日和山を降り、次にお伺いした金港堂書店石巻店は週刊ポストで連載された「復興の書店」にも取り上げられた書店さんだ。武田店長が我々に話をしてくれた。「地震当日は従業員の安否確認ができませんでした。沿岸部にもスタッフはいたのでとても心配でした。実際、同居していた祖父が流されてしまった者もいたのです。あの日からは生きるのに精いっぱい。そして1週間ほどは市の中心に入ることができませんでした。家族が中に入れない。道から行けないので仙石線の線路の上を歩いて中に入った人もいました。当初は食べ物、飲み物が無く悲惨な状況。しばらくして水が引くと砂塵が酷く閉口しました。あのときマスクの供給はありがたかったですね。もちろん店は開ける

ことができませぬ。24の小中学校への教科書供給もままならない。4月27日に1階の4分の1を使って高校向け教科書の販売を始めましたが全面再開したのは6月15日のことでした。」我々はテレビや新聞報道でその現場のことが分かった気になってしまふ。実際にその場所に行って人に会い、直接話を聞くということの意味の大きさに図書館長や金港堂の店長、あるいは街を移動するために乗ったタクシーの運転手さんの話を聞くことで深く気付かされた。

長いレポートになってしまったが、最後に書いておきたいことがある。それは初日に仙台市で行われた地元書店さんを招いての懇親会でのこと。紀伊國屋書店仙台店の加藤敦子さんのご挨拶が会場の胸に沁み込んだ。それは「本とは何か?」という問いに対する一つの答えだったと思う。そのステキなお話を聞き記そう。

〈紀伊國屋書店仙台店・加藤敦子さんの挨拶〉

私は11年前に梅田本店から転勤になりました。今年11月に定年になります。実は長い私の書店人生活の中

で一つだけ後悔があって、それを白状しなければなりません。それは梅田店にいたときのこと。見るからにヤンキーな兄ちゃんが紙に何か書きつけたメモをもってきて、「これはあるか?」と聞かれた時のことです。そこには「ショウホウゲンゾウ」と書いてありました。私はその書名『正法眼蔵』を確認すると、「それはあなたには難しい、もっと簡単な仏教の入門書があるからそっちを読みなさい」と対応しました。しかしそんな彼らがう人ほど続けてやってきたときに、何かおかしいぞ、これは何かあるなと感じたのでした。もしかししたら、彼らを指導する立場にある先生が、「おまえらなあ、『正法眼蔵』を一生かけて読めよな」と教えたのではなかったか、とはっと気づいたのです。先生がこの子たちのためにそれを奨めたのではなかったか? なぜあのとき私は求められるがまま素直に『正法眼蔵』を売ってあげなかったのだろう? なぜあの時簡易な入門書などを私は勧めてしまったのだろう。私のしたことはまるでおせっかいなことではなかっただろうか。今はわからなくても手許に置いて、20年30年かけて読めばいい、そういう本もあるじゃないか、

ということに何故思いを巡らすことができなかったのだらうか？ あの出来事は私の長い書店員としての後悔なのです。これを最後に申しあげたかった。

本には一生かけて読む本もある。確かにきょうあす読まなくてもいつかページを聞くと心や人生の糧になる、そんな本が。本、とりわけ人文書とはそういうものなのかもしれない。この日、加藤さんの話を聞けて本当によかった。

10月17〜20日の3日+1日の東北研修旅行では紙幅の都合で書くことができませんでしたが他にもたくさんの方から素敵なお話を伺うことができました。郡山市のジュンク堂書店さん、福島市の岩瀬書店中合店さん、仙台市のあゆみブックスさん、ヤマト屋書店仙台三越店さん、仙台八文字屋本店さん、紀伊國屋書店仙台営業所さん、そして石巻市のヤマト屋書店中里店さん、未来屋書店石巻店さんありがとうございました。仙台市一番町の金港堂書店本店では我々がお店に到着するタイミングで店の外に藤原社長が出迎えていた

きました。そしてトーハン、日販の東北支店の支店長はじめ皆さんありがとうございました。東京から同行していただいたトーハンの倉根さん、日販の岩崎さん、大阪屋の平野さん（いずれも仕入れセクション）、ありがとうございました。心から感謝申し上げます。これからも私たち人文会の会員社は皆さんと繋がりが、ともに歩いていきたいと思えます。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷5-32-21 みすず書房内

2013年1月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏書房	衣笠真二郎	113-0021	文京区本駒込1-13-14	3947-8253	3947-8255
紀伊國屋書店	三橋 直也	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	大野 友寛	108-8346	港区三田2-19-30	3451-3593	3454-7029
勁草書房	小笠原 勝	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	片桐 幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	奥村 友彦	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	三澤 宏幸	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	朝倉 哲哉	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	根井 浩一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	古川 真	102-0073	千代田区九段北3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未來社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

会長 菊池明郎(筑摩書房)
 代表幹事 田崎洋幸
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保卓夫

(◎委員長(幹事) ○副委員長)

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○華園 斉・三上直樹・三橋直也・片桐幹夫・衣笠 真二郎
 調査・研修委員会 ◎橋元博樹 ○古川 真・駒谷光彦・三澤宏幸・片山伸治・小笠原 勝・奥村友彦
 広報委員会 ◎大野友寛 ○根井浩一・水谷幹夫・岩野忠昭

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com>

UTCP叢書5
存在のカスタロフィー
 〈空虚を断じて譲らない〉ために

小林康夫著
 2011年の東日本を襲った大震災を踏まえ、人間存在の問題を世界大のパスベクティブで哲学的にも状況論的にも論じ抜いた待望の論集。◆2940円

田中浩集
第1巻 トマス・ホップズI
第2巻 トマス・ホップズII

ホップズ、シュミット、長谷川如是閑の研究を通じて、「自由・平等・平和」の思想を追い求め続けた氏の軌跡を集成する待望の著作集。◆各6090円

哲学原理の転換
 白紙論から自然的アプリオリ論へ

加藤尚武著
 生命の技術化・商品化がもたらす過去に例のない倫理問題について、われわれはいかにして理性的な合意を形成すべきか。いまあらためてヘーゲルの哲学体系の不可能性と対峙し、応用物理学に課せられた使命を論ずる。◆2310円

※表示価格は税込
未来社 〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
 tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp/

ドイツ反原発運動小史
余りの風

ラートカウ、なせドイツは成功したか。司法、産業界、科学者、市民など主要アクターを検証。海老根・森田 監訳
 堀江敏幸、小島信夫、山田稔、藤枝静男、古井由吉、田村隆一、須賀敏子らの文学に捧ぐエッセ・クリティック。三三三円
 藤山直樹 人物と病理の分析を軸に古典の力を読解。精神科医の本格的落語評論。立川談春師匠との対談を収録。三三三円
サイド音楽評論 全2巻
 サイド、信頼厚い音楽評論の初の集成。鮮烈な四四篇と未完の書の草案。D・バレンボイム序文、二木麻里訳 各三三三円

みすず書房 (税込)
 東京本郷 5-32-21 <http://www.mszejp>

二〇世紀 満洲歴史事典
 日本人にとって、満洲とは何だったのか。三期構成、約八〇〇項目で、満洲一〇〇年の歴史がわかる。14700円
日本石造物辞典 21000円
 日本石造物辞典編集委員会編 石塔、板碑、石仏……。約一五〇〇の石造物を都道府県別に収録。関連用語も解説。

吉川弘文館 価格税込
 東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

「学問人 森林太郎の航跡、明治という時代の精神史」
森鷗外 小堀桂一郎著
 日本はまだ普請中だ 760頁 / 4410円
 精励格勤の生涯を明治精神史の象徴的一章として描く。
三島由紀夫 島内景二著 3150円
福田恆存 川久保剛著 3150円

ミネルヴァ書房
 〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堀谷町1
 TEL075-581-0296 価格税込み / 宅配可

3.11 後を生きるためのしなやかな思想

降りる思想

江戸・ブータンに学ぶ

田中優子・辻信一著 私たちには今、降りることが必要とされている。そのモデルは江戸とブータンにあり。辻信一と田中優子が3.11を踏まえて語りあう。46判・1785円

脱原発のカギはここにある！

自然エネルギー革命 をはじめよう

地域でつくるみんなの電力

高橋真樹著 自治体や市民による各地の自然エネルギー発電をルポ。資金、運営、エネルギー活用など脱原発への希望の回路が見える。46判・1890円

東京都文京 大月書店 電03-3813
本郷 2-11-9 4651(税込)

●教科書には出てこない様々なニュースが

新しい「歴史」を発見させてくれる！

江戸時代 265年 ニュース事典

山本博文「監修」 蒲生真紗雄・後藤寿一・一坂太郎「著」

江戸時代すべての年のニュースを、1年分見開き2頁で構成して紹介。4つのテーマ（政治経済・文化思想・事件災害・社会風俗）で内容を区分け。どの年からでも楽しく読める画期的な事典！

B5判並製574頁・5460円



柏書房 東京都文京区本駒込1-13-14
Tel.03-3947-8251(価格税込)

マルクス経済学方法論批判

—変容論的アプローチ—

小橋道昭 著 3360円

経済原論

菅原陽心 著 3150円

包括的コミュニティ開発

—現代アメリカにおけるコミュニティアプローチ—

仁科伸子 著 5250円

現代台湾コミュニティ運動の地域社会学

—高雄県美濃鎮における社会運動、民主化、社区総体营造—

星 純子 著 7980円

個人加盟ユニオンの社会学

—東京管理職ユニオンと女性ユニオン東京(1993年~2022年)—

小谷 幸 著 7560円

安全・安心コミュニティの存立基盤

吉原直樹 編著 7560円

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

〈選択〉の神話

自由の国アメリカの不自由

選んだのか？ 選ばされたのか？

買い物、選挙、人生……自由に〈選択〉しているつもりでも、その実態は不自由だった！

行動経済学、神経科学、心理学、社会学などの知見から多角的に検証し、よりよい選択を可能にするための方法を、豊富な具体例からわかりやすく解説する。▼1995円

ケント・グリーンフィールド／高橋洋訳

紀伊國屋書店 出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519 価格は税込

慶應義塾大学出版会

http://www.keio-up.co.jp/

詩学講義 無限のエコー

吉増剛造 著

映像と色とりどりの授業譜を駆使しておこなわれた慶應義塾大学「詩学」講義の完全書籍化。中原中也、石川啄木、武満徹、ラフカディオ・ハーン、萩原朔太郎……。詩人たちの「声」と「音楽」がこだまする、キセキの講義録。 ●4410円

泉鏡花—百合と宝珠の文学史

持田叙子 著

幻想の魔術師・泉鏡花の隠された別側面—百合と宝石のごとくかくわしく華やかに輝く豊かな世界観を明らかにし、多様な日本近代文学史の中に位置づける試み。繊細な視点と筆致の冴える珠玉の本格評論。 ●2940円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

吉本隆明 第二の敗戦期

忽ち重版

これからの日本をどうよむか

日・中・米の政治的関係性から、言葉とコミュニケーションの問題、戦後の葛藤から「第二の敗戦期」と呼べる現代について。縦横無尽に紡ぎ出される言葉の海をどのように読み解くか。これからの日本を考えるヒント。 1575円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 (価格+税込)
http://www.shunjusha.co.jp/

山口智美・斉藤正美・荻上チキ[著]

社会運動の戸惑い

フェミニズムの「失われた時代」と
草の根保守運動



好評2刷

四六判上製400頁
2940円(価格税込)

00年代、フェミニズムと保守運動はなぜ衝突したのか。保守運動の実際とフェミニズムの入り込んだ隘路を描く。

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

子どものための 美しい国

●子どもの願いや夢をみごとに描いた児童文学の傑作

ヤヌシ・コルチャック
中村妙子 訳



幼くて王となったマトは、子どものためのユートピアをつくろうと改革にのりだすが、親友の裏切りや他国からの侵略など様々な問題が……。こんな子どもたちの心がわかる大人がいたなんて！ 黒柳徹子氏

A5変型504頁・3360円

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940
http://www.shobunsha.co.jp

戦後最大の思想家、吉本隆明。「学生反乱の時代」には多くの読者を獲得したが、その思想は「正しく」理解されていたのだろうか。難解な吉本思想とその特異な読み方について、明快に論じ切る！ 四六判 1470円

吉本隆明という「共同幻想」

呉智英著

筑摩書房

サービスセンター ☎048(651)0053
http://www.chikumashobo.jp/

精神分析技法の基礎

ラカン派臨床の実際

B.フィンク著/榊田貴史・中西之信・信友建志・上尾真道訳 米国を代表するラカン派の精神分析家が現在流行する他の精神分析の理論や著者との対比を通して、何が精神分析なのかを明確にした好著。 5250円

子どもと家族の①うつ病 認知行動療法

C.ヴァーダイン他著/下山晴彦監訳 子どもが抱えるさまざまな問題への対処法を多数の事例で解説する全5巻シリーズの第1巻目。本書では、うつ病に苦しむ子どもの心と身体への援助法を伝授する。 3570円

子ども虐待への挑戦

医療・福祉・心理・司法の連携を目指して 日本子どもの虐待防止センター監修 小児科医として子ども虐待に取り組み道半ばして斃れた坂井聖二の論文集とその意志を継いで心理・法律・福祉領域等で活躍する実践家らによる虐待防止への提言集。 3990円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666(税込)

40年間の日中関係の歩みを編年体で詳述、各時代の重要なトピックを抽出し、分析する。グローバル時代の相互理解にむけた決定版通史。

日中国交正常化40周年記念出版	
日中関係史	
1972-2012(全3巻)	
I 政治	高原明生・服部龍二編 3990円
II 経済	服部健治・丸川知雄編 3675円
III 社会・文化	園田茂人編 3675円

東京大学出版会

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
http://www.utp.or.jp/ (価格税込)

「知の再発見」双書

B6変型判 各1,680円

モン・サン・ミシェル

J・P・ブリゲリ著/池上俊一監修
—著名な世界遺産、その格好の入門書。

フラ・アンジェリコ

N・ローレ著/森田義之監修
—奇蹟の修道士画家、その生涯を活写。

ドガ

H・ロフレット著/千足伸行監修
—花が嫌いな貴族画家、その孤独特な画業。

シト一会

L・プレスイール著/杉崎泰一郎監修
—規律の弛緩と原点回帰、その反復の歴史。

殺人の歴史

B・ウダン著/河合幹雄監修
—殺人事件とは何なのか、その社会性を問う。

創元社

大阪市中央区淡路町4-3-6(税込面)
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
東京支店 Tel.03-3269-1051

2013年1月25日発行 年3回発行 第114号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

編集協力 アジール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉